

インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

目次 contents

第39回国際福祉機器展 H.C.R.2012 機構企画・監修による特別企画 「片手で使えるモノ展」に多くの来場者（三好泉）	2
TOKYO PACK 2012 —2012東京国際包装展— Tokyo International Packaging Exhibition 2012 開催（森川美和）	4
国立がん研究センター創立50周年記念イベント報告 ～がんの今とこれから～わかる、とりくむ、ささえあう（星川安之）	6
共用品授業の展開 —小学生と中学生、学習への取り組み—（森川美和）	8
荒川区コミュニケーション支援ボード —東日本大震災を契機に作成—（金丸淳子）	9
〈随想〉私と共用品第60回 「患者会として、52年の活動から」（長谷川三枝子）	10
CEN-CELENEC—JISC情報交換会合第1回アクセシビリティ WG会議開催 —アイルランドのダブリンにて—（松岡光一）	11
〈事務局長だより〉UNTOUCHABLE ～“un”を取り除くその日まで～（星川安之） 共用品通信 奥付	12



第39回国際福祉機器展H.C.R.2012

機構企画・監修による特別企画

「片手で使えるモノ展」に多くの来場者

9月26日～28日の三日間、東京・有明の東京ビックサイトで開かれた第39回国際福祉機器展（主催：全国社会福祉協議会、保健福祉広報協会）の特別企画として、（公財）共用品推進機構は「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー～片手で使えるモノ展～」の企画・監修し、また会期中は展示説明としても参加した。展示コーナーは開場から最終日の閉展時間までたくさんの来場者で大変な賑わいであった。

長く暑かった今年の夏もようやく一段落した9月末、国際福祉機器展の会場は、高齢者や障害のある人、家族の方など福祉用具の使用者、施設・企業関係者や学生等、多様な来場者で、広い会場もいっぱいのにぎわいであった。39回目になる今年の展示会には世界中の15カ国・1地域から548社（国内490社、海外58社）、20,000点にもものぼる福祉機器が集まり、三日間の来場者は総計約108,000人であった。

六つに区切られた会場では、国内外の企業ブース、行政や大学・研究機関などの展示のほか、特設会場では「障害児のための子ども広場」、「福祉機器最前線」、「ふくしの防災・避難用品コーナー」とともに共用品推進機構が企画・監修として協力した「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー～片手で使えるモノ展～」が開催された。

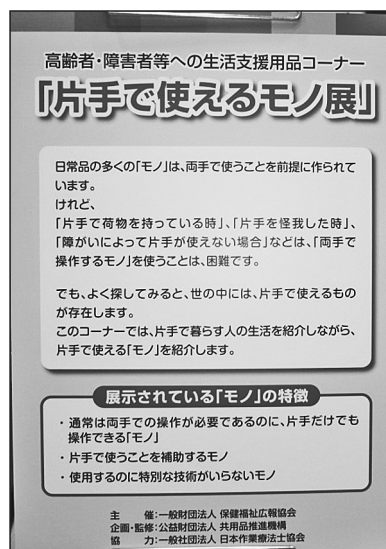
展示テーマは「片手で使えるモノ」

本機構は、2009年から特別企画「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー」の企画・監修として参加・支援してきた。

今年度の展示テーマは「片手で使えるモノ」。

このテーマを検討するに当たり、ご自身も手の不自由さを感じている(株)高齢社会長上田研二氏の「片手で使える製品を探すのが大変」という意見、片まひの当事者岡田正敏氏の暮らしのノウハウ、作業療法士協会の大熊明氏のアドバイスなどを参考にした。

展示コーナー入口には次のような趣旨を掲



(パネル内容)

日常品の多くの「モノ」は、両手で使うことを前提に作られています。

けれど、

「片手で荷物を持っている時」、「片手を怪我した時」、「障がいによって片手が使えない場合」などは、「両手で操作するモノ」を使うことは困難です。

でも、よく探してみると、世の中には片手で使えるモノも存在します。

このコーナーでは、片手で暮らす人の生活を紹介しながら、片手で使える「モノ」を紹介します。

示した。

今回の展示では「片手で使えるモノ」を選定する時の条件を以下のように定めた。

- ・通常は両手の操作が必要であるのに、片手だけでも操作できるモノ
- ・片手で使うことを補助するモノ
- ・使用するのに特別な技術が要らないモノ

この条件を踏まえて、作業療法士協会や当事者の協力を得て主に国際福祉機器展参加企業の製品から選んだ展示製品は、31社・69点となった。



大勢の人でにぎわう展示会場

六つの生活シーンで製品を展示

製品展示では、すべての展示製品を実際使用・体験できるようにして、見ても触ってもわかりやすく展示するために、展示ブースを家事、着衣・外出、調理、食事、入浴・トイレ、余暇・文化の六つの場面に区切り、壁面には説明パネル、製品には説明カードを用紙した。説明カードには、出品協力企業の展示ブース番号も記載し、製品に関する詳細な説明やカタログなどが必要な人は、企業ブースに誘導・ガイドすることにした。



場面ごとの説明パネルと製品展示（調理場面）

各生活場面の説明パネルには、それぞれの場面で使われる動作を、「両手ですることを」→「片手でするには」のように対比してイラストと写真で示した。

各場面の展示製品は10点前後で、たとえば、写真に示した調理場面では、鍋やヤカンやま

な板、皮むき器やトングなどの調理用具、瓶のふたを開けるための補助具や紙パック・ペットボトルなどを片手で持ちやすくする取っ手類である。

両手動作を片手で行うためには、対象物をどのように押さえるかがポイントになる。そのために、展示したまな板にはジャガイモやリンゴなどの対象物を刺しておけるように釘が付けてあり、ピーラー（皮むき器）はテーブルに取り付けられるようになっているので、持たないで使える。このように、どの製品にも片手で使えるような工夫や配慮があり、他分野の製品でも参考になる。



生活場面の説明パネル（調理場面）

多くの来場者の声は

実際に生活で困ったと感じられている方、施設関係者や行政の方、メーカーなど企業の方、また若い学生さんも熱心にパネルや展示製品の写真を撮り、実際に片手で一つひとつの製品を試していた。来場された方からは、「テーマがわかりやすい」、「実際に試しながら、比較して見られるのが良い」などの声が多かったが、「どこで展示製品を買うことができるのか」、「詳しいカタログや資料がほしい」、「説明パネルや展示製品の印刷物はないのか」などや「包丁が見たかった」、「ふたを回せる道具は?」、「ボタン掛けに期待して見に来ました」などのように具体的なモノに関する要望も聞かれた。課題としてあげられていた「展示台が高い」など車いす使用者には見にくかった状況等を今後の改善点とし、機会があればさらに幅広く、充実した「片手で使えるモノ」展を実現したいと考えている。

みよしいずみ
(三好泉)

TOKYO PACK 2012 —2012東京国際包装展—

Tokyo International Packaging Exhibition 2012開催

平成24年10月2日（火）～5日（金）の四日間、東京ビッグサイト（東京国際展示場）東ホール全館（東京都江東区有明）でTOKYO PACK 2012（2012東京国際包装展）が開催された。

TOKYO PACK（東京国際包装展）は昭和41年から隔年開催され、今年度24回目を迎えた。本展示会は、さまざまな業界で活躍している包装資材・容器、包装機械を中心に、調達から生産、物流、流通、販売、消費、廃棄・リサイクルに至るまでのあらゆる分野を網羅した世界有数の国際総合包装展である。

10月2日から始まったTOKYO PACK 2012は四日間で入場者数は175,870人であった。本年の出展は国内から491社、海外から109社で、2,270小間の出展規模となった。

また毎年、本展示会の目玉の一つとなっている「2012日本パッケージングコンテスト」の表彰式も厳かながら開催され、表彰を受けた製品を展示したブースは多くの人たちで賑わった。



（2012日本パッケージングコンテストで入賞した作品を展示しているブースの風景）

2012 日本パッケージングコンテスト表彰

TOKYO PACK 2012が開催された展示会場の会議棟にて、10月4日（木）「2012日本パッケージングコンテスト表彰式」が開催された。

このコンテストは、優れたパッケージとその技術を開発普及することを目的として、公益社団法人日本包装技術協会の主催で毎年開催されているもので、昨年度より共用品推進機構理事長賞も設けて頂き、本年2年目は、

花王株の「置き型リセッシュデザインコレクション」（写真1）を選ばせて頂いた。製品の開けやすさ、説明の分かりやすさ等の細かな配慮が選定のポイントとなった。



（写真1：「置き型リセッシュデザインコレクション」）

また経済産業大臣賞を受賞したのは、(株)ミツカン、(株)コバヤシ、大日本印刷株の「金のつぶ『パキッ!とたれ』」（写真2）であった。

フタ部をタレ容器として活用し、フタを切り離して真ん中で割るだけでタレを出すことができる新容器を採用。子どもや高齢者にも簡単に作業ができるように形状や角度を調整した点が評価された。

今回応募作品320点の中で、グッドパッケージングとして入賞したのは116製品で、そのうち最高賞のジャパンスター賞を受賞し

たのは先に紹介した2点を加え以下の13製品である。



(写真2:「金のつづ『パクッ!とたれ!』」)

- 経済産業省産業技術環境局長賞『アルペクトES ECOスプレー』
- 経済産業省製造産業局長賞『タンク付きウォシュレットの地球と人にやさしい包装』
- 日本商工会議所会頭賞『オーディオメカユニットの段ボール包装』
- 日本貿易振興機構(ジェトロ)理事長賞『防水ワコボン』
- 公益財団法人日本生産性本部会長賞『気泡シート製吊り下げ型中仕切り「ハンモック」』
- 社団法人日本パッケージデザイン協会賞『いつでも新鮮シリーズ卓上ボトル(200ml)』
- 公益社団法人日本マーケティング協会会長賞『スーパーマイルドシャンプー&コンディショナー』
- 社団法人日本グラフィックデザイナー協会賞『ポール&ジョー2012スプリングクリエイション』
- 消費者団体推薦賞『育苗用紙ポット』
- 公益社団法人日本包装技術協会会長賞『ペーランドリーピュア/モアクリア(新詰め替え容器「注ぎ上手」)/『スーパードライチェンジカラー缶』

(詳細は以下のページからご覧ください。)

<http://www.jpi.or.jp/saiji/jpc/2012/index.html>

共用品推進機構法人賛助会員2社が出展

弊機構の法人賛助会員の大日本印刷(株)と凸

版印刷(株)が本展示会に出展。

大日本印刷(DNP)は、「想いをつつむ笑顔をつなげる『モノ×コト×ヒト リレーション』」をテーマとして、魅力的な商品やパッケージが快適さや心地よさを生み出すため、新しい価値を創造するための展示を行った。また、生活者の視点で“やさしさ”を考える包装設計指針「USE・FULL Packaging」の元、①人へのやさしさ、②製品へのやさしさ、③環境へのやさしさの三つの視点から生み出された製品や取り組みについても紹介した。



(DNPが開発中の目が不自由な人達が、バーコードから製品情報を読み取ることができるシステム。バーコードの位置は触って分かるようになっている。)

凸版印刷は、「共に作り、共にひらく未来」とテーマ付け、「印刷テクノロジー」と「グループ総合力」を最大限に駆使し、商品の企画、開発、生産、システム、プロモーションなどにおける様々な解決方法を提示した展示を行った。また当日頂いたパンフレット『パッケージングのごあんない』には、「環境・UDポイント」のマークが付いたものがあり、UDポイントの中には、“チャックを付けることにより、使い勝手が向上”したものや、“容器上部に点字”がついたものなどが展示されていた。

より多くの人にとって使いやすい製品など、様々なパッケージ情報がどこよりも先に入手できる「TOKYO PACK」。再来年の開催が待ち遠しい。

もりかわみわ
(森川美和)

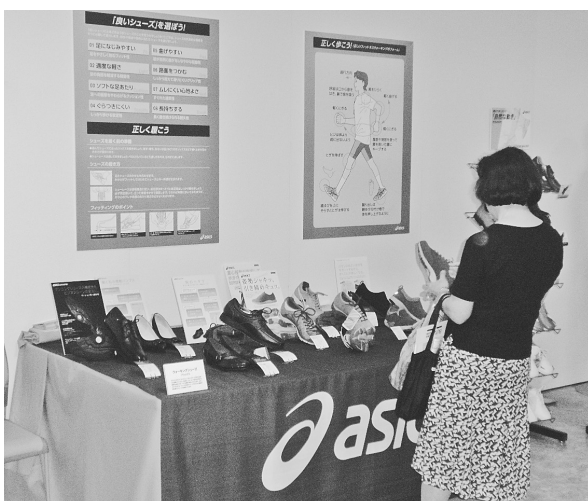
た「身体を動かすこと」は、歩行、運動、階段昇降、自転車に乗る、外出など、多岐に渡っている。

「歩行」では、「痛みにより歩行が困難」、「足の痺れにより和室が歩けない」、「外出」では、「外出時、感染に注意しなければならない」、「吊り革がつかめない」、「つかまるところがないと不安」などがあげられた。

このテーマでの展示コーナーでは、「身体の動きを助ける製品紹介」として杖、歩行補助具（写真1）や、不便さを解決する靴（写真2）などが正しい靴の選び方などと共に紹介された。



(写真1：歩行補助具)



(写真2：選び方紹介付き靴の展示)

(2) 生活の工夫カード

不便さ調査のもう一つの発展は、看護部の人たちが作った「生活の工夫カード」（写真3）である。

生活の工夫カード ...All Activities for Cancer Patients...
50th Anniversary

靴選びに困ったとき

患者さんが感じる不便さには

- 「むくみがあり靴がきつい」
- 「しびれで歩きにくい」
- 「ヒール靴がはけなくなる」 などがあります

原因

- カペシタピン（ゼローダ）や一部の分子標的薬などの副作用である「手足症候群」は、抗がん剤投与開始から2~4週間後に、手のひらや足の裏に水ぶくれ、皮膚のひび割れ、痛みなどが生じます。足の裏が重症化すると、歩くこともままならなくなります。
- 抗がん剤によっては、末梢神経が障害され、手足のしびれが起こります。抗がん剤治療の終了後、しびれが回復するまでに時間がかかります。完全に回復するのが難しい場合もあります。
- 薬の副作用によるむくみや、リンパ浮腫による足のむくみがあります。

生活の工夫

- 底が滑りにくい靴を選びましょう。しびれやむくみがあると転びやすくなります。
- 足を圧迫しない大き目の靴を選びましょう。皮膚を保護するために、柔らかい素材の、ゆとりが合った厚めの靴下はききましょう。「手足症候群」のときは、足にかかる体重を分散させるために、体重を足底全体で支えられるような靴がよいでしょう。ハイヒールは避けた方がよいでしょう。
- しびれは、動かしたり温めたりするとやわらかくなります。
- むくみがある場合は、皮膚を傷つけないように注意しましょう。休む時は足をクッションなどにのせて、少し高くするだけでもむくみが和らぎます。リンパ浮腫がある場合は、リンパマッサージを行い、浮腫の悪化を予防しましょう。

国立がん研究センター中央病院看護部

(写真3：生活の工夫カード 靴選び)



(写真4：生活の工夫カード棚)

この台（写真4）には32種類の生活の工夫カードが置かれている。

不便さ調査から抽出された不便さが32項目に集約され、一枚一枚には、「不便さの内容」、「その原因」、そして、看護部の人たちが担当し「生活の中で行える工夫」がそれぞれに記載され、来場者は自由に持ち帰ることができる。

まとめ

「不便さ調査」は、解決案が出されて初めて意義が出る。今回の調査並びにイベントに関わり、製品などのハード面と、「生活の工夫カード」に集約されるソフト面の解決案があることを改めて思ったと共に、多くの叡智が集まる事の意義を強く実感できた。

(ほしかわやすゆき
星川安之)

共用品授業の展開

—小学生と中学生、学習への取り組み—

共用品推進機構は、設立当初より、子ども達向けの共用品授業を展開している。その内容は、当機構の事務局内、あるいは共用品が関連する催しものに参加してもらい一緒に働くことを体験する就業体験（インターンシップ）や、修学旅行や社会科見学などの学校行事として弊機構に来局し共用品を学習するものなどがあるが、特に多い展開例は実際の教育現場（小学校、中学校、大学等）に出向いて授業を行うものである。

学校で行う場合は、既存の共用品の冊子や教材セットを用いて行うことが主だが、訪問した際に、校内で工夫されている点（自動販売機やスロープなどの配慮）や共用品（家庭科室の点字付き洗濯機や使いやすい食器類など）を見つけておき、授業の中で紹介することもある。学校の中に共用品があることを知ると子ども達にとって共用品はより身近になる。

中学生らしさ、小学生らしさ、その年らしさ

神奈川県横浜市にある芹が谷中学校を訪問したのは10月12日（金）の午後であった。

元気な中学1年生に迎えられ、まずは共用品の冊子や共用品の教材セットを用いて説明を行った。

共用品の定番ともいえるシャンプーのギザギザやアルコールの上部の“おさげ”の点字、牛乳パックの切り欠きやラップのWマーク（エンボス加工）などは、共用品に精通している方々なら“知っていて当然”と思われるかも知れないが、まだまだ十分に認知されていない。小学校で勉強した経験があったり、テレビなどで見たりした子ども達は、「あそこにギザギザがある」、「点字が付いている」などと囁き始めたり、分からない子を茶化したりはするが、手を挙げて堂々と大きな声で発表したり、我さきにと発言しようとしたりはしない。それでも“自分は知っている”という雰囲気をも十分に醸し出すので、前に出てきてもらい配慮を皆に説明してほしいと頼むと、照れながら説明をしてくれる。どこの中学校に行ってもこのパターンなので、きっとこれが中学（1年生）の特徴の一つなのだろうと思う。これまで共用品の学習の機会がなかった子ども達も、友達の発言を機に共用品のポイント（見つけ方）や、誰にとって特に助かる工夫なのかを知る方法（技術）を身につけていき、短時間で、たちまち“さりげな

い配慮”が見つけられるようになる。その理解力と吸収の早さには毎度驚かされる。

小学校の授業では、共用品の工夫が分かるかと率先して手を挙げ発言しようとする子どもが多い。また、個々の共用品の配慮点が分からなくても、じっくり共用品を眺め、何とかヒントを頼りに、自分で配慮点を見つけ出そうと前のめりになる。そのうち、自力で配慮点を見つけることになるのだが、“分かった！”と思った瞬間の表情は輝きと自信に満ちている。

共用品授業の意味

ほんの少しの時間の、ほんの少しの関わりだが、子ども達は着実にそれぞれの視点で共用品を理解し、自分にできることを模索しようとする。弊機構が子ども向けに普及活動を続けて行く意味は、子ども達のこの一瞬の姿にある。

もりかわみわ
(森川美和)



(視覚障害のある人の生活について、タカラトミーのたかはしれいこ高橋玲子さんから話しを聞く子ども達)

「患者会として、52年の活動から」

はせがわみえこ
長谷川三枝子

公益財団法人共用品推進機構 評議員
(公益社団法人日本リウマチ友の会会長)



◆はじめに◆

当会は、1960年元国立伊東温泉病院で治療を受けた152名の患者で発足。以来「リウマチに関する啓発・リウマチ対策の確立と推進に関する事業を行い、リウマチ性疾患を有する者の福祉の向上に寄与する」ことを目的に活動を続け、本年4月1日より、公益社団法人となりました。

◆関節リウマチとは◆

関節リウマチ患者は、日本では約70万人といわれ、30～50歳代の女性に多く発症し、未だ原因不明で根本的治療法が確立されていない難病です。

症状は、関節の滑膜で炎症が生ずるため全身の関節が傷害され、腫れて痛み、進行すると変形して機能障害を起こすことが少なくありません。

◆リウマチ患者の実態より◆

当会は、5年ごとに患者会員の实態調査を実施し、その結果をまとめて「リウマチ白書」を発行しております。白書の中では、その時代のリウマチ患者をとりまく医療・福祉・社会環境等が数で裏付けられて見えてきます。『2010年リウマチ白書』では、機能障害の進行により身体障害者手帳を57.1%が所持しており、そのうち1, 2級は62.7%となっております。

機能障害を持った患者は、日常生活・社会生活共に多くの場面で、様々な問題に直面しています。“家事ができない”“外出ができてにくい”“休学・留年・退学”“休職・退職・廃業”“離婚・別居”等々。そして、このような人にとって「つらいこと」は“病気が治らない”ことと共に“何かにつけて人手を頼むとき”といことです。

この患者の思いに応えるために、当会は、福祉機器・装具・自助具等の活用により日常生活動作（ADL）の自立を目指した情報発信に力を入れてきました。特に自助具等の開発につながる提言・モニター協力等は長い間取り組みを続けています。

このような活動の中で「共用品」との出会いがあり、リウマチを背景として協力、参加する機会を得、「共用品という思想」は何かを考えているところです。

◆リウマチ治療の新たな時代◆

今、リウマチ治療の目標は「寛解」を目指せるようになりました。

これは、生物学的製剤の使用により骨破壊を抑えることができるようになったことによります。長い間、機能障害により阻害されていた自立と社会参加が可能となりつつある中で、会として積み重ねてきた知識・情報を広く社会に還元できるよう、これからも努めてまいります。

(題字は、なかの なつみ中野奈津美・〔公財〕共用品推進機構運営委員)

「荒川区 コミュニケーション支援ボード」

—東日本大震災を契機に作成—

荒川区（東京都荒川区）は、災害時に、コミュニケーションを取ることが困難な障害のある人たちが意思を表示できるよう、気持ちや状況、質問事項などを絵と言葉で表現した「荒川区コミュニケーション支援ボード」（以下、「支援ボード」という。）（写真1）を作成しました。東日本大震災を契機に検討してきたもので、支援ボードを指さすことで、ボランティア等と自分の体調や必要なものの意思確認ができます。



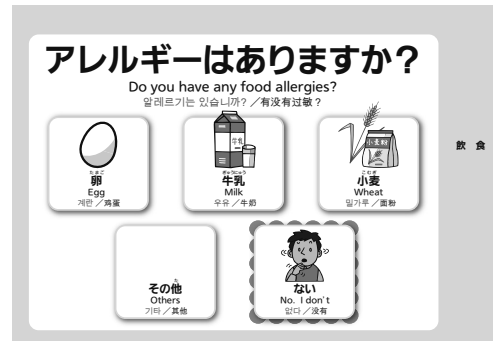
(写真1 「荒川区コミュニケーション支援ボード」)

災害が起きたとき、食料・物資の供給、体調管理、家族のことなど、スムーズに情報交換ができるように設計されていて、例えば、「あなたの名前は?」といったその人に関する基本的な情報から、欲しい食料品や欲しいもの（写真2）、アレルギーの有無（写真3）



(写真2 「ほしいものはありますか?」)

等を伝えることができます。



(写真3 「アレルギーはありますか?」)

外国人とのコミュニケーションを想定して、日本語をはじめ、英語、韓国語、中国語の4カ国の言語が使われています。

災害時にも持ち運びしやすい手帳サイズで、ホワイトボードマーカーを使うと、何度も書いたり消したりすることができ、まさに緊急時にも素早く対応することができます。

この支援ボードは、下記のアドレスからダウンロードが可能です。

「荒川区 コミュニケーション支援ボード」
<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kurashi/shogaisha/topics/sienbord.html>

「荒川区 コミュニケーション支援ボードマニュアル」（単ページ用）

<http://www.city.arakawa.tokyo.jp/kurashi/shogaisha/topics/sienbord.files/manyuuarutan.pdf>

発行：東京都荒川区福祉部障害者福祉課
 協力：財団法人（現：公益財団法人）明治安田こころの健康財団、セイフティネットワークプロジェクト横浜

かなまるじゅんこ
 (金丸 淳子)

CEN-CELENEC-JISC情報交換会合

第1回アクセシビリティWG会議開催

—2012年10月26日、アイルランドのダブリンにて—

CEN-CENELEC（欧州規格作成団体）と、JISC（日本工業標準調査会—経済産業省に設置されている審議会では工業標準化全般に関する調査・審議を行う）は、両機関の協力関係構築を目的とした覚書を締結し、毎年定期的に情報交換会合を行っている。この情報交換会合の下部組織として、「ICT（情報通信技術）」、「鉄道関係」や「スマートグリッド」等の個別のワーキンググループ（WG）が設置され、それぞれの分野での情報交換を行っている。

今回、このWGの一つとして「アクセシビリティ」を設置することがCEN-CENELECから提案され、第1回会議が2012年10月26日、アイルランドのダブリンにて行われた。

この会合は、ISO/IECガイド71（高齢者及び障害のある人々のニーズに対応した規格作成配慮指針）改訂のためのISO/IEC/JTAG（合同技術諮問グループ）の第3回会議が2012年10月23日から25日までの3日間、アイルランド規格協会（ダブリン）で開催され日本から多くの専門家が参加することから、このJTAG会議の後、26日に同会場で開催することになったものである。

CEN-CENELEC側からは昨年設立されたSAGA（Strategic Advisory Group on Accessibility—アクセシビリティに関する戦略諮問グループ）の議長と幹事、「持続性とサービス」規格の担当者、スペイン・アイルランドの専門家等5名が参加し、日本からはJISC、交通エコロジー・モビリティ財団の代表者を含む7名が参加した。

会議ではCEN-CENELEC側から、①ヨー

ロッパ指令（マニフェスト）、②SAGAの役割と活動、③ノルウェーとスペインのアクセシビリティについて、の説明があった。日本側からは日本での交通のアクセシビリティと「トイレの操作部」、「触知案内図」、「公共空間の案内」、「コミュニケーション支援用ボード」等ISOに提案済み、あるいは提案予定の個別の案件について説明し、欧州側の協力を求めた。最終的にこの新しいWGの目標として下記を設定することとした：

①CEN-CENELECとJISC間で、アクセシビリティ／アクセシブルデザインに関する標準化活動の情報交換を行う、②両機関はアクセシビリティ／アクセシブルデザインに関する標準化活動に協力する、③両機関は相互に、アクセシビリティ／アクセシブルデザインに関する国際標準化活動を支援する、④可能な限り重複作業を避ける。また下記をこの目標を達成するための戦略とした：

①関連分野におけるアクセシビリティの問題を網羅するために情報交換を行う、②JISCと欧州規格作成団体の標準化活動に関する情報交換を行うために、基本的に年1回会議を行う、③JISCと欧州各国の標準化団体の協力による国際規格開発を検討する、④重複作業を避けるために早い段階で相互の新業務項目提案を連絡する。

上記の内容を11月27、28日にベルギー・ブリュッセルで開催予定のCEN-CENELECとJISCの情報交換会合総会で提案することで合意した。

まつおかこういち
(松岡光一)

UNTOUCHABLE

～“un”を取り除くその日まで～

アンタッチャブル
untouchableは、フランス語、英語でも同じ綴りで、辞書をひくと「触れてはならない、禁制の」とある。

「UNTOUCHABLE」というタイトルの映画が「最強のふたり」とのタイトルに変化し、9月から日本でも公開された。

新聞、テレビ、ラジオでは、「フランス国民3人に1人が笑い、泣いた」、「東京映画祭初3冠」等、絶賛の言葉が踊った。

事故で全身マヒとなり、車いすでの生活になった大富豪が、住み込みの介護人を募集。多数の応募者の中から、スラム街に大家族で貧しい生活を送る、世間的にはこの仕事に一番不向きと思われる主人公が採用され、しかし心が通じ合う・・・といったところまでは、テレビや新聞の広告で理解できる。

「人は見た目で判断してはならない」、「チャンスは自分でつかむものだ」などの気持ちを高ぶらせたい時と合致していれば、すぐにでも映画館に足を運んだのだが、その時の私はそういう気持ちでもなかった。

上映開始から、3週間がすぎた。映画配給会社が力を入れていた作品は、上映開始前の1週間、上映開始後に1週間、テレビ、ラジオ、新聞などに、監督、出演者が頻りに登場するがそれを過ぎるとぱたりと情報が途絶え、静かに上映が終了していく。

しかしこの映画、2週間たってもテレビのCMから消えない。テレビをあまり見ない自分にすら、日に何度も車いすを押す主人公と全身マヒの大富豪の会話を見かける。「こんな地味なテーマを世界中の人が見て笑って、泣いた?」、「ほんとかいな?」でも3週目になってもCMがテレビから流れてくる。4週目、ついに映画館に足を運んだ。



星川 安之
ほしかわ やすゆき

事務局
だより

会場に入ってびっくりしたのが、一席も空いている席がないことである。この十数年見た映画、宣伝につられて行ったものもあるが、一席も空いていない・・・なんてことはなかった。なぜ?の疑問は、見終わった瞬間に完全に消滅した。

特に、実話からなる映画であることを、エンドロールで、実在の二人が、今どこで何をしているかを示す笑顔の写真を見た時に、映画配給会社の人達が、二週間たってもテレビCMをやめなかったことに納得した。

障害のある人となない人の間にあるとされてきたuntouchable(触れてはならない)の、un(～てはならない)が、その関係を複雑にしている場面も多くあることを「笑わせながら、泣かせながら」教えてくれている。

「共用品って何だろう?」、「みんなの会議」、などの冊子を通じて、共用品推進機構も、unを省く作業を行ってきている。次世代を背負う多くの子どもたちに読んでもらっているこれらの冊子を、機構設立当初から一緒に作ってきたデザイン会社グリックス社長、峯松祥一さんが10月20日、がんのため亡くなられた。まだまだ一緒にやりたい仕事があり残念でならない。

社会に存在する必要のない“un”を取り除くという彼の目指していた「夢」を、引き継いでいきたいと思っている。

共用品通信

【会議】 (9月)

- 第6回展示会ガイド普及委員会 (6日)
- ADフォーラム (11日)
- 第1回TC173/SC7/WG2・ガイド71検討委員会 (27日)
- (10月)
- 第1回TC173/SC7/WG3検討委員会 (2日)
- 第1回TC173/SC7/WG1検討委員会 (3日)
- 第1回TC159国内検討WG委員会 (3日)
- 第2回IEC/SMB/SG5/AAL検討委員会 (9日)
- 第1回TC173/SC7/WG4検討委員会 (16日)
- 第3回JTAG、ISO/IECガイド71改定会議(ダブリン23日～25日)
- JISC-CENCENELEC会議(ダブリン 26日)

【外部主催会議】

- (10月)
- 標準化と品質管理全国フォーラム2012(高齢社 16日)

【講義・講演】 (9月)

- 日本福祉大学 名古屋(星川・森川、16日)
- 関東シニアライフアドバイザー協会講演(星川、29日)
- (10月)
- 九段小学校 共用品授業(森川、4日)
- 台湾金属工業研究発展中心で講演(星川、11日)
- 横浜市立芹が谷中学校 共用品授業(三好、森川、12日)
- 拜島第三小学校 共用品授業(森川、18日)
- (社福) 武蔵野「暮らしやすさをみんなのモノに」(星川、18日)
- 八王子市立山田小学校(森川、26日)

【イベント】

- (9月)
- 国立がんセンター 50周年イベント(15日～16日)
- 国際福祉機器展「片手で使えるモノ展」(26～28日)

【インターンシップ】

- (9月)
- 跡見学園女子大学 2名(3～14日)

アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル 第81号

2012(平成24)年11月25日発行
"Incl." vol.12 no.81

©The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2012

隔月刊、奇数月に発行

一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (公財)共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話: 03-5280-0020
ファクス: 03-5280-2373
Eメール: jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL: http://kyoyohin.org/

発行人
事務局

鴨志田厚子
星川 安之
森川 美和
金丸 淳子
水野由紀子
松岡 光一
三好 泉
田窪 友和

執筆・協力 関戸 菜美
(五十音順) 中野奈津美
長谷川三枝子

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)
サンパトナース(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。